

茶の湯 文化学会 会報

第124号 / 2025年3月25日
発行 茶の湯文化学会
京都市左京区下鴨森本町15
生産開発科学研究所内
〒606-0805
TEL 075-702-9270
FAX 075-702-9314
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp
<https://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/>

十六世紀の茄子茶入の理想形について

荒井 欧太朗

茶入の分類の一つに、「茄子」と呼ばれる一群がある。その形状は多様であり、中には破損後に修復が加えられた個体も存在する。また西田宏子氏は、「尻彫」と呼ばれる別の一群と「茄子」の明確な違いを指摘することは難しいとしている（『唐物茶入 茶人』に選ばれた中国産褐釉小壺」、根津美術館編・出版『唐物茶入』、二〇〇五年）。ただし天正年間（一五七三―一五九二）成立の『山上宗二記』において、尻彫と茄子は異なるものとして扱われていた。尻彫については「町の棚にもあり、その数を知らず」、「当世は主遠き物なり」とあり、総じて注目に値しない道具とされている。対して茄子では主だった計六点が取り上げられ、

中でも「紹鷗茄子（松本茄子）」、「似たり茄子（百貫茄子）」、「つくも茄子」、「珠光小茄子」を合わせた「天下に四つの茄子」は「茶湯の道具、万の中の頂上なり」と評されている。このことから、少なくとも天正年間には茄子と尻彫とを区別する基準が存在したと考えられる。この基準を解明することで、かつて存在した茄子茶入の理想形を具体化できることが予想される。

ことから、既に茶入の形にいくつか名称が存在していたことが分かる。さらに茶入（当時の呼称は「抹茶壺」）の分類を記録した最初期の記録である『君台観左右帳記』にも、茄子は他の茶入の分類と共に記載されている。

一方で尻彫は、茄子と異なり『君台観左右帳記』の数ある類本で最古本にあたる永正八年（一五一一）の年号と相阿弥の奥書を写す東北大学本に記載されていない茶入の分類である。尻彫を掲載する『君台観左右帳記』諸本の一つに、永正十五年（一五一八）の年記を写す国立歴史民俗博物館本がある。尻彫は「なすひのわるきなり」として凶入りで掲載されている。また同じ年記がある松浦家旧蔵本に

も同様の図があり、「なりのわろき茄子、しりわろき本也」と記述されている。このことから尻彫は、茄子の造形上悪いとされる特徴を共通して持つ個体群が、茄子から分離する形で永正年間（一五〇四—一二）前後までに成立した分類と推測される。言い換えれば、同時代に茄子に対する美の基準が成立し、これに従って茄子茶入の優劣が判断されたことになる。

その後天文年間（一五三二—一五五）末頃に成立した『清玩名物記』には、茄子茶入が十二点列挙されているが尻彫茶入は見当たらない。また天文二三年（一五五四）の年号を写す『茶具備討集』には、能阿弥・相阿弥の言葉として「小壺は茄の形を知ること肝要也。少し違う者は茄にあらざる也」が伝えられ、後来の数寄者（茶人）は「尻彫良（尻彫）は手にも取るべからず」としていた事が記されている。つまり天文年間になってからも、茄子と尻彫は厳密に区別され、尻

彫を好まない茶人がいたこととなる。同様の傾向は天文年間以降も続き、前述の通り『山上宗二記』は茄子と尻彫をはっきり区別して扱っている。ただし佐久間不干斎は千利休所持の個体と豊臣秀吉所持の個体を名物としており、尻彫への評価は一定していなかったと考えられる（矢野環『名物茶入の物語』淡交社、二〇〇八年）。

ここまで茄子と尻彫の分類上の区分が生じた永正年間前後から天正年間にかけての展開を概観してきた。以上を踏まえた上で、茄子と尻彫を峻別する条件、または理想とされる茄子茶入の条件が何だったのかについて考察する。なお先行研究で指摘された「なすひのわろきなり」とされた尻彫の特徴は、

- (1) 茄子よりも肩部が若干衝いている
- (2) 器体の丸みが乏しい
- (3) 底部に至るカーブが中途できつく曲がっている

である（矢野環『名物茶入の物語』淡交社、二〇〇八年）。

永祿年間（一五五八—七〇）頃に成立した『唐物上古物置様の事』には、茶入の形態上の見所についての記述が複数ある。同書第二四条では、武野紹鷗が「なすひのならひハ口をうつくしく作候てかたのなきを上とする。すその立過たるを上とする」と説いたことが伝えられている。

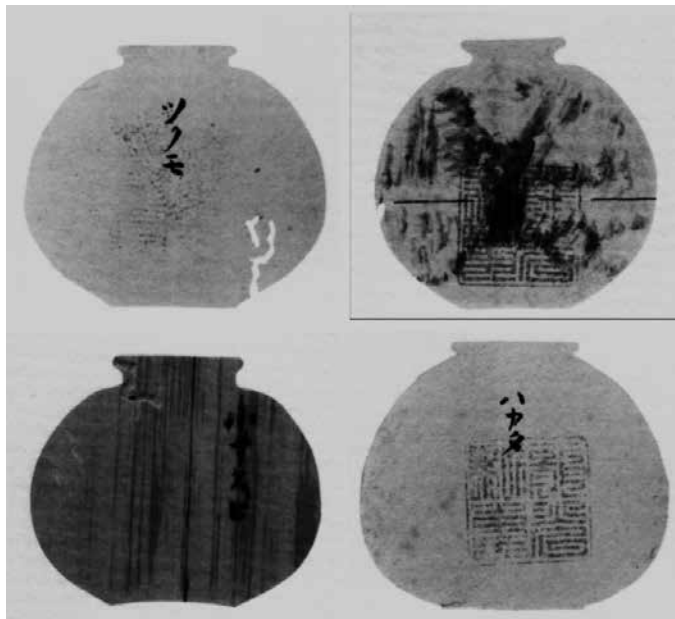
つまり紹鷗の時代に理想とされた茄子茶入の条件は、
①…口頸部の造形が美しい
②…肩部が衝いていない
③…「すその立過たる」器体である
以上の三点だった。

それでは条件①を満たす口頸部とはどのようなものだったのか。『唐物上古物置様の事』第八条では「小つほに口の事をひねりかへしと申事 是も茄子丸つほなどの（後略）」、「茄子や丸壺といった「小つほ（小壺）」の口頸部を、特に「ひ

ねりかへし（捻り返し）」と呼ぶことが述べられている。また『山上宗二記』や津田宗及の拝見記では、茄子茶入に関して口頸部に注目し、捻り返しが強くはつきりしたものを評価する。よって茄子では、口頸部の捻り返しが見所とされ、強くはつきりとした個体が好まれたと分かる。

条件②は、尻彫の特徴（1）と深く関わっているものと云える。茄子では、なで肩の個体が好まれていた。

条件③に関しては、「すその立過たる」器体を具体化することが必要になる。その手掛かりとなるのが、元奥書に永祿八年（一五六五）の年記がある『分類草木』第九六条の記述である。「小壺ノ腰ヲ腰ト云ハ悪シ。フクラト云（後略）」、「茄子のような小壺の腰部を特に「フクラ」と呼び、本来は膨らんだ部分と認識されていたと考えられる。『山上宗二記』中の「天下に四つの茄子」は、『清玩名物記』



【図版】茶入切型 大徳寺龍光院蔵
 (「大徳寺龍光院 国宝 曜変天目と破草鞋」MIHO MUSEUM、
 2019年より引用)

にも収録された個体であり、既に天文年間の時点で注目されていた名物と云える。これらの形状を写した切型四点(図版)が大徳寺龍光院に伝来しており、いずれも胴部が大きく膨らみ、胴裾から底部にかけて緩やかな曲線を描くという特徴がある。このように器体が

大きく張り出した胴部に向かって緩やかな曲線を描いて立ち上がっていることを「すその立過たる」と表した可能性が高い。尻膨の特徴(2)・(3)は、こうした特徴とは対照的であり、尻膨を茄子と峻別する条件でもあったと考えられる。

以上、十六世紀の茶の湯に関する文献史料等に基づき、茄子と尻膨の違い、茄子茶入の理想形について考察してきた。十五世紀後半から十六世紀初頭にかけて、既存の茶入の形である茄子に対して厳格な美意識が成立したと考えられる。これに基づき、口頸部の捻り返しが強く、撫で肩で胴部が大きく膨らみ、胴裾から底部に向かって緩やかな曲線を描く個体が理想とされるようになった可能性が高い。こうした茄子茶入と異なる特徴を持つ個体は、茄子として劣ったものと見做され、その中から尻膨という新しい分類が成立した。尻膨には、肩が衝いて器体の丸みに乏しく、底部に至るラインが途中で大きく曲がるという特徴があり、茄子の理想形とは大きく懸け離れていた。

例会

近畿例会

(令和六年十月二十六日)

「後鳥羽上皇の水無瀬離宮(水無瀬殿)と喫茶」

豊田裕章

後鳥羽上皇が愛好した水無瀬離宮(水無瀬殿)には、本御所・新御所(上御所)・南御所(菌殿)などの複数の御所や小御所・馬場殿・長廊などの付属施設から構成される中核区域があり、その山側にも庭園をともなった山上御所・上皇の御願寺の蓮華寿院(水無瀬殿御堂)・六条宮雅成親王の御所などが存在したと考えられる。

榮西の『喫茶養生記』には初治本と再治本があるが、前者は後鳥羽上皇の仰せで榮西が執筆したものと推定する。北宋時代、とりわけ徽宗以後に白い茶が尊重されるが、この白い茶を泡が白いものであると見れば、それは突然変異に

よるものだけでなく、早期に採取された茶の芽に豊富に生じている白い毛（毛茸^{もじ}）によるものもあつたと考えられる。『喫茶養生記』では早春の採茶が推奨されているが、その時期の日本の茶は越冬したばかりの冬芽である。ただし、冬芽の内部にも毛茸があり、これを粉碎して攪拌すれば白色の泡の茶になったと考えられる。このような点から考えると後鳥羽上皇が水無瀬離宮で茶を喫していた場合、その茶も白色の泡の茶であつた可能性がある。

（令和六年十一月十六日）

「大工頭中井家伝来の茶室起こし絵図について」

谷直樹

中井家は江戸幕府の大工頭をとめた家柄で、畿内・近江六か国の大工・木挽を支配し、公儀作事である城郭、内裏、寺社の設計・監理を担当した。初代の正清（一五六五〜一六一九）は伏見城、二

条城、江戸城、駿府城、名古屋城の造営に携わり、古田重然（織部）や小堀政一（遠州）と親しい間柄にあつた。二代の正侶（一六〇〇〜一六三二）は元和〜寛永初年に行われた大坂城の再築と二条城の拡張工事に、小堀政一の下で大工頭を勤めた。後水尾上皇の仙洞御所の造営中に伏見の小堀屋敷で開かれた茶会に、正侶の名が残されている。

三代目の正知（一六三一〜一七一五）は、承応度、寛文度、延宝度、宝永度の内裏造営を担当した。正知は茶人としても名を残し、また茶室起こし絵図を工夫した人物と目される。『槐記』によると、近衛家熙が正知に依頼して、常修院宮の四畳台目の茶室を起こし絵図に仕立てさせたところ。中井家伝来で最古の大徳寺高林庵囲の茶室起こし絵図には、元禄十六年（一七〇三）の年紀があり、正知の時代にあたると見られる。中井家には文化・文政年間の目録があり、中井家所有

の囲（茶室）や数寄屋（座敷）の建地割図（起こし絵図）33通の名が記されている。

「大工頭中井家関係資料」（五、一九五五）は平成二十三年（二〇一一）に重要文化財に指定され、その直後から保存修理事業が始まった。中井家資料に含まれる茶室起こし絵図は、和紙が脆弱化し、自立しないものもあるので、順次、修理を実施している。

（令和七年二月十五日）

「胡銅製作技法研究序説」

山本堯・新郷英弘

茶の湯の重要な道具でありながら、不明な点が多くのごさされている胡銅についてこれまでおこなってきた共同研究の成果を、山本・新郷の二名で発表した。

山本報告では、まず胡銅の文化的背景について取り上げ、中国史的研究の立場から考察を示した。胡銅や三具足には中国古代青銅器を模した器形・紋様がしばし

ば見られるが、中国大陸では本来はそうしたデザインが儒教的な観点から重視されていたこと、胡銅は宋代に制作されていた「倣古銅器」として位置づけられることを指摘した。さらに、一般的には禅宗の荘嚴具としてとらえられている三具足の形式について、儒教儀礼の一種である積奠の場での荘嚴方式に類似することを述べ、禅宗を介してその知識が国内にもたらされた可能性を推測した。最後に、こうした胡銅を介した文化交流に、いわゆる「唐物」が成立する過程が読み取れるとし、茶の湯文化研究における胡銅の重要性を強調した。

つづく新郷報告では、胡銅の製作技法について鑄造技術の観点から考察を加えた。野村美術館に所蔵される3点の「唐物」の胡銅の観察し、型持（スパーサー）の痕跡や施紋技法の特徴など、鑄造技術にかかわる属性に違いが見られることを指摘、こうした現象が製

作技法のバリエーションを示している可能性を述べた。これまで漠然と「唐物」と考えられてきた胡銅には、一部に国産品が含まれる可能性の-highは先行研究によって指摘されてきた。今回報告した鑄造技術の観点からの分析が、いまだ解決されない胡銅の産地問題を考えるうえで有効な手がかりとなりうることを提起した。

「雲龍釜とその文様に関する一考察」

伊住禮次朗

本発表では利休好みの雲龍釜をテーマとして取り上げた。雲龍釜とは、雲と龍の文様が施された筒形の釜である。西村道治が著した『釜師由緒』には、利休の釜師として与次郎及びその小工と考へる藤左衛門と弥四郎という三人が阿弥陀堂釜、雲龍釜、四方釜、丸釜、尻張釜を鑄たと記録されている。その中で、利休の茶会記に使用された記録があるのは雲龍釜の

みであり、唯一文様を有する。そのように特別な存在感を有する釜であるものの、基準作の選定や雲龍文様のルーツに関する議論は乏しい。本発表では雲龍文様を有する与次郎作品の基準作として豊国神社所蔵の「鉄燈籠」(重要文化財)を取り上げ、その文様に関する研究成果を発表した。3D計測により取得した文様のデータを平面に展開した画像を作成し、文様の全体像及び細部の確認を容易にしたことは成果の一つである(協力:株式会社SABIA)。当該作品の龍の顔貌表現にはデフォルメされた特徴があり、芦屋鋳物師の作品と共通する要素が認められる。芦屋鋳物師が鑄造した日朝混淆型式鐘をはじめ、幾つかの作品に与次郎作「鉄燈籠」の雲龍文様との近似性があることを指摘し、与次郎が意匠として参照した作品があるという仮説を示した。今後はそのような仮説に基づき、調査対象を拡げて雲龍釜とその文様のルー

ツを辿る調査を続け、東アジアの金工史というスケールの中で京都の釜師や与次郎の存在をどのよう位置付けられるかを探りたい。

例会のご案内

東京例会
令和七年六月七日(土)
(会場:根津美術館)
*オンライン配信あり。
午後二時

下村奈穂子
「石州の茶碗と高原焼・浅草焼」
谷村玲子
「数寄屋坊主について(仮)」

※例会の日程・会場等、変更する
場合・未定についても合わせて
ホームページまたは事務局まで
お問い合わせください。個人宛
にメール等でのお知らせはして
おりません。
令和七年七月十二日(土)
(会場:未定)
*オンライン配信あり。

午後二時
萩玖
「文化と支配——清朝における「乳
茶政治」を事例として(仮)」
依田徹

※東京・近畿例会では、会場とZ
oomのハイブリッド開催を
行っています。オンラインの参
加は、ホームページの例会参加
申込フォームよりお申し込み
と同時に、年会費二千円(会員・
四千円(非会員))をお振り込み
ください。

令和七年十二月六日(土)
(会場:未定)
*オンライン配信あり。
午後二時

岩田澄子・横山直範

『君台観左右帳記』と三谷宗鎮『和漢茶誌』が示す烏蓋について―天目釉再現実験にみる建窯系釉薬の特徴―(仮)

岩間眞知子

「鎌倉期以降、日中間を往来した僧と茶」

東海例会

(会場：昭和美術館会議室)

午後二時～三時半

(開場午後一時半)

令和七年四月二十六日(土)

岩田澄子

「茶人ササ耳から考える『南方録』の成立背景―淡路屋釣舟花入の宗薫書状と南坊宗啓―」

令和七年六月二十一日(土)

山内香穂

「春岱とその周辺」

令和七年九月二十七日(土)

下坂玉起

「羽帚について」

令和七年十一月八日(土)

午前十時～午後三時

茶会「玄中周辺の茶の湯」

茶券三千元(入館料込)

近畿例会

令和七年五月十日(土)

(会場：京都国立博物館)

*オンライン配信あり。

午後一時半～(開場午後一時)

廣田吉崇

「豊前小倉の古市古流について(仮)」

降矢哲男

「未定」

※京都国立博物館会場へは入館料

無料で入場していただけます

が、専用入口となりますので、

ホームページをご確認のうえお

越しください。(観覧希望の方

は、別途入館料をお支払いくだ

さい。)

令和七年七月五日(土)

(会場：同志社大学今出川キャン

パス 良心館RY105)

*オンライン配信あり。

午後二時～

砂川佳子

「紀州藩奥女中の茶の湯」

内田彩加

「住吉蒔絵平棗 山本春正作(湯

木美術館蔵)」について

令和七年九月六日(土)

(会場：同志社大学今出川キャン

パス 至誠館S4)

*オンライン配信あり。

午後二時～

佃一輝

「煎茶文会における発意の仕掛け

～「箕山瀑布図」を例に～」

船阪富美子

「野村得庵の煎茶―賀寿と読書の

楽しみの席飾り―」

令和七年十一月八日(土)

(会場：同志社大学烏丸キャンパ

ス 志高館SK110)

*オンライン配信あり。

午後二時～

岡本文音

「未定」

木村栄美

「未定」

金沢例会

令和七年五月頃

(会場：未定)

八尾嘉男

「茶人伝(仮)」

令和七年七月六日(日)

(会場：未定)

下坂玉起

「羽帚新情報」

令和七年九月二十八日(日)(予定)

茶の湯文化紀行(滋賀県方面バス

旅行)

北野宗道「茶の湯の史跡を訪ねる」

高知例会

令和七年六月二十九日(日)

(会場：高知県立文学館 慶雲庵
茶室)

午前10時～正午

「茶の湯文化学会二〇二五年度大会の研究発表をテーマとしたシンポジウム」

発表者 未定

正午～午後四時

薄茶席

席主 二名、会費 五〇〇円

* 参加希望者は予め連絡をして下さい

令和七年八月三十一日(日)

(会場：高知県立文学館 慶雲庵
茶室)

午前10時～正午

茶の湯関係文献を読み所感の発表

「書籍紹介 選定」

令和七年十一月二十四日(月)

(会場：高知県立文学館 慶雲庵
茶室)

午前10時～正午

茶の湯関係文献を読み所感の発表

「書籍紹介 選定」

令和七年六月二十九日(日)

(会場：高知県立文学館 慶雲庵
茶室)

午前10時～正午

茶の湯関係文献を読み所感の発表

「書籍紹介 選定」

午前10時～正午

茶の湯関係文献を読み所感の発表

書籍輪読 I

正午～午後四時

軽食茶事

席主 三名、会費 三千元

* 参加希望者は予め連絡をして下さい

さい

新刊紹介

『決定版 茶の湯の手紙文例集』

茶事・茶会の案内状から会記まで

淡交社編 淡交社

定価一、七六〇円(税込)

お知らせ

令和七年度総会・大会の

ご案内

令和七年度総会・大会を左記の

日程で計画中です。詳細は令和七

年四月に郵送・ホームページにて

ご案内いたします。

総会・大会

日程：令和七年六月十四日(土)

会場：横浜情報文化センター六階

(情文ホール)

* オンライン配信あり。

シンポジウムテーマ：「

鎌倉時代の喫茶について」

懇親会

会場：黄山飯店

見学会

令和七年六月十五日(日)

会場：三溪園(臨春閣(見学)・

春草廬(呈茶))

文化庁の『令和五年度「生活文

化調査研究事業(煎茶道)』報告書

につきました

会報一―三号の巻頭文で矢野環

会長(当時)が、文化庁地域文化

創生本部事務局発行の『令和二年

度生活文化調査研究事業(茶道)

報告書』を紹介された。煎茶道に

関しても、昨年、報告書が完成し、

ウェブ上に公開されたので、ここ

でお伝えする。

文化庁参事官(生活文化創造担

当)発行『令和五年度「生活文化

調査研究事業(煎茶道)』報告書

である(註1)。序の「本事業の

目的」によれば、文化庁では、令

和元年度、生活文化の一分野とし

ての前茶道についての調査研究が

始まった。令和三年度には、歴史

的変遷や社会的位置づけに関する

学術論文等の調査を実施、翌令和四年度には、国民の興味関心等の意識を把握するインターネット調査を実施した。令和五年度は、煎茶道に関わる団体・教室、用具・原材料についての調査を行い、前年度までの結果を加えて、全体としてとりまとめている。

序の「本事業の概要」には「本事業は、煎茶道がおかれている現状等について詳細な実態把握を行うため、

・煎茶道の成立、変遷を把握するための文献調査
・煎茶道への興味関心等に関する国民意識調査

・煎茶道の団体・流派へのアンケート調査

・煎茶道教室へのアンケート調査
・煎茶道用具・原材料に関する製造業者へのヒアリング調査

を行い、3回の有識者会議を経て、報告書としてまとめたものである」とある。ただし「今回の調査では、煎茶道用具・原材料に関

する調査が十分に行えず、網羅的な調査にならなかったことから、これらの調査結果の分析については参考資料への掲載にとどめた」と注記されている。原材料とは、主に葉茶や炭を示すと考えられるが、今後の「網羅的な調査」が期待される。

結の「本調査研究事業のまとめ」の項目は、

1. 煎茶道において継承されてきたこと

2. 煎茶道具等の継承について

3. アンケート結果から見た今後の団体・教室活動の方向性と課題

4. 煎茶道を次世代に継承するために

となっている。この部分（一一一～一一五頁）に目を通すだけでも、煎茶道の現状と課題を知ることができる。

最後は「煎茶道は、日本の喫茶に係る文化の一つの形であり、文人趣味に代表されるような日本の

伝統的な生活文化である。これら煎茶道を次世代に継承していくには、煎茶道に対する一般の人々の認知度を上げたり、体験機会を増やしたりするなどの活動が必要であり、団体・流派の自主的な活動を重んじながら、国や地方公共団体においても当該分野に関する活動への適時適切な支援の在り方の検討を行っていくことが重要である」と結ばれている。

本報告書の目的は「生活文化の煎茶道分野の保護・振興策の検討に資する基礎資料とすること」（序）にある。煎茶道についてのこのように大規模な調査研究事業は貴重で、各方面でこの報告書が大いに利用されて、煎茶道の振興に寄与することが期待される。

なお、令和二年度は茶道のほか、書道・華道、令和五年度は煎茶道のほか和装の報告書が公開されている。香道・礼法・盆栽・錦鯉も順次公開される予定である。

（註一）

https://www.bunka.go.jp/tokel_hakusho_shuppan/tokeichosa/seikatsubunka_chosa/pdf/94080401_01.pdf

※二〇二五年度年会費を払込みくださいようしくお願いいたします。

